

研究ノート

中国科幻小说の諸相(2)

— 国際的 SF 大会の波及 —

山本 範子

目次

- 1 2007年実施の国際大会
- 2 日本での中国 SF 特集
- 3 中国での日本 SF 紹介
- 4 中国における SF 国際交流

1 2007年実施の国際大会

科幻小说という単語は、SF小説の中国語訳である。中国では硬科幻(ハードSF)を重視する傾向が未だに強く、科学考証にこだわるのは作者側だけではなく、読者側にも見受けられる。雑誌の読者投稿欄やインターネットの掲示板などを覗いていると、「あの小説の科学考証はなっていない。なぜなら……」といった熱い議論が日常茶飯事に交わされている。とはいえ、奇幻小説(FT小説)も市民権を得てきた今、SFとFTにまたがるような作品が登場してきたことは否めない。特に80年代作家と呼ばれる、1980年代以降に誕生した若者たちによる作品は、ゲーム、映画などさまざまな影響を受けて、のびのびとした新しい作風を見せている⁽¹⁾。

さて、そのような中で2007年に二つの国際的なSF大会がアジアで開催された。一つは日本(横浜)での世界SF大会である⁽²⁾。これは文字通り、世界規模で行われており、アメリ

カやカナダなど各国を経て、初のアジア地区開催となった。

この世界SF大会にあわせて、日程も少し前に設定して開催されたのが、中国(成都)国際科幻・奇幻大会である⁽³⁾。こちらは日本に行く前の諸外国のゲストを、ついでに中国にも呼ぼうという意図もあったようだが、デイヴィッド・プリンなどの大物が多数訪れ、見事に成功したと思われる。

中国での大会には、日本SF作家クラブが⁽⁴⁾代表団を派遣し、また古くからの中国SF研究者である林久之氏も⁽⁵⁾参加して、それぞれに日本のSF事情などを発表、日中のSF交流に貢献した。

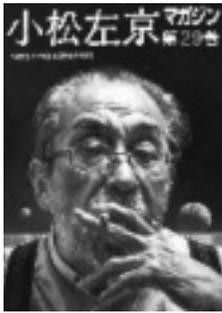
また、日本での大会では逆に中国からゲストを招待し⁽⁶⁾、中国SFやSF教育などについて語ってもらったが、それらについては拙論を参照していただきたい⁽⁷⁾。

さて、これらの大会が終了した後、各国で大会についての報告がなされたのは言うまでもない。中国、日本も同様である。さらに中国では2008年に北京オリンピックが開催されたこともあり、世界中の興味が集まった年とも言えよう。そういった情勢の中で、日中ではさまざまなSFの紹介が行われたのである。

2 日本での中国 SF 特集

2007年に行われた大会については雑誌『SFマガジン』(早川書房)で詳細なレポートが発表されているほか、新聞やインターネットの記事などにもなっているが、本稿ではその中でも中国 SF についてののみ言及したい。

横浜でのワールドコンにおける中国 SF 企画の一つについては、まず『小松左京マガジン 第29巻』⁽⁸⁾で、発表された。これは中国の SF 作家である韓松氏⁽⁹⁾をゲストとした企画で、「[「アジアの SF と周辺事情～現状を語る」の報告]というタイトルである。内容は主に企画で語られたことを再編集してまとめたものであり、新しい視点や情報は含まれていない。



続く第30巻では、同じくワールドコンでゲストとして来日した、SF作家で評論家の呉岩氏⁽¹⁰⁾の作品「マウス・パッド」が全文翻訳、紹介された⁽¹¹⁾。



これまで、日本で中国圏の SF が紹介されることは少なく、主に同人誌などで紹介されてきていた、というのが実情である。そのため、一部の興味ある読者にしか知られておら

ず、広く SF ファンに認知されていたとは言いがたい。むしろ、何度か「波」というものはあり、商業誌に翻訳が掲載されたり、翻訳が出版されたりもしたのだが、どちらかとい⁽¹³⁾うと台湾や香港の作品が多かったように思われる。

というのも、中国大陸の作品が商業ベースで発表されるには、その作品内部を貫く政治的な思想が日本人を遠ざけていたのではないかと考えられるからである。

また中国 SF は「科学を普及する」という目的で発展した歴史もあり、そういった作品においてはストーリーやキャラクターは重視されず、娯楽小説としての楽しみとはほど遠い内容であった。この点でも、娯楽性を求める読者には受け入れがたかったのかもしれない。

しかし、昨年の世界的な SF 大会をきっかけに少し風向きに変化が訪れたようである。まずは前述したように、小松左京氏による SF 雑誌『小松左京マガジン』が、中国 SF をもっと紹介すべきである、という立場で、二度にわたって中国 SF を紹介したことである。これは中国だけに特定したものではなく、もっと幅広いアジアの SF にも目を向けようという意図の一端であるようだ。どちらにせよ、世界 SF 大会がなければ掲載のきっかけはなかったわけであり、非常に得難い機会であったと言えよう。

なお中国では、小松左京氏の作品は小説の翻訳のみならず映画でも非常に有名であり、多くの中国 SF 作家たちに大きな影響を与えている。ゲストとして来日した韓松氏は小松氏の大ファンであり、何冊ものタイトルを瞬時に挙げてどこがどう素晴らしかったかを熱く語っておられたほどである。

続いて、2008年7月には老舗の SF 雑誌である早川書房の『SFマガジン』で、中国 SF 特集が組まれた⁽¹⁴⁾。これは一つには北京オリンピック開催時期というのも関連しているであ

ろうが、世界 SF 大会以来連絡を取り合っているという、中国の科幻世界雑誌社の協力によるものでもあるらしい。

実際に相手の雑誌社から候補作が何作か送られてきたものを、翻訳者が下読みしてまとめ、コメントつきで提出したの中から選出されたのが、掲載作品である。今回紹介された作家は三人で、韓松、劉慈欣、江波である。他にも様々な立場、ジャンルの作家がおり、もっと多く紹介できればと思うのだが、紙幅の都合であればいたしかたない。むしろ、初めての中国 SF 特集がようやく組まれた、ということに着目すべきであろう。



韓松氏の作品は訳者の推薦による『水棲人⁽¹⁵⁾』で、これは長編小説『紅色海洋』の一編である。黄色人種と白色人種の対立、月と地球の戦い、といったテーマ自体は新鮮味に欠けるきらいはあるが、背景を貫く政治的・思索的なテーマは非常に読み応えがある。韓松氏が中国文学好きの日本人に人気があるのも、こういった中国独特の、政治的に複雑な部分を描いているからだとも言えよう。むしろ、中国でも絶大な人気を誇っており、SF というよりはむしろ幻想文学の分野に近いものがあるようにも思われる。

劉慈欣氏はハード SF 作家として中国における第一人者であり、『さまよえる地球』は著名な作品の一つ。宇宙規模の壮大なアイデアと理系出身らしい科学的な知識、希望に満ちた登場人物といった構成は氏の作品に特徴的なもので、そこが中国人読者に愛される所以でもある。この作品には日本人が登場する。⁽¹⁶⁾

中国人作家にとって、日本はそれほど遠い国ではない、ということなのかもしれない。もちろん宇宙規模で考えれば当たり前のことなのだが。

『シヴァの舞』の江波氏については、実はあまり情報が無い。未知のウイルスと、インドの神々という組み合わせがやはりアジア的とも言えるかもしれない。読後感としては、掲載された三作品の中では最も欧米 SF 的というか、我々日本人でも違和感なく受け入れられる物語展開であった。

これらの作品の感想をインターネットなどで調べてみたところ、おおむね好評だったのは『シヴァの舞』であったようで、あとの二作品、特に『水棲人』は政治的な部分が敬遠された模様である。中国の作品は、この政治的思想や人民の感情などとは切っても切り離せないもので、そういった部分こそが面白く、読み応えがあるのだと思うのだが。これはやはり中国文化好きの感じ方なのかもしれない。

『SF マガジン』ではこのほかに、科幻世界雑誌社副編集長の姚海軍氏の寄稿「中国 SF の現状」と林久之氏の「〈科幻世界〉の今日」が掲載されている。どちらも現在の中国 SF を知る上では貴重な情報であるが、こういった文章が商業誌に発表されるのは珍しい。世界 SF 大会が後押ししたのだとすれば、非常に歓迎すべき効果であるとも言えよう。

8 月には、十年間休刊となっていた中国 SF 研究会の会誌、『中国 SF 資料之八 尋人启示』が発行された。



これは商業誌ではなく、所謂同人誌に分類すべきものだが、中国のSF界では有名な研究誌であり、既に高い評価を受けている。復刊は喜ばしい。主力となったのは、中国SFについて論文も発表している上原香氏⁽¹⁷⁾で、世界SF大会に刺激を受けた彼女が主導して、これまで会誌を一手に引き受けていた林久之氏と、中国SFの翻訳や紹介に着手しはじめた筆者を誘って完成させた。タイトルになっているのは、中国SF界の重鎮、譚楷氏の四川大地震における慟哭の詩である。氏はほかにもパンダについての感動的な文章を送ってくださったのだが、未だに翻訳紹介できないでいる⁽¹⁸⁾。

顧均正氏の「性交」、韓松氏の「天下の水」といった小説の翻訳、呉岩氏の「中国SFにおける西洋理論の影響」といった評論、そのほかエッセイなどが掲載されており、中国SFの紹介としてはまずまずの再出発である。

編集人の都合で、次号の発行は2010年の予定。それまでにはホラーやFTも紹介できるようになっているか、楽しみである。

同じく8月には『世界のSFがやって来た!! ニッポンコン・ファイル2007』⁽¹⁹⁾が発売された。



これは日本SF作家クラブ企画の全記録集である。この中には中国SF関係の三つの企画、「アジアのSFと周辺事情」、「SF創作活動を教育すること」、「SF雑誌編集者から見た日中SF気質」も収録されている。コンパクトにまとめられた内容ではあるが、概括を知る上では便利かつ有用である。

以上、ざっと述べたように、2007年の世界的SF大会の結果として、この二年間で中国SFを紹介する機会が増えたのは間違いないであろう。ただ問題は、それが今後も継続されるかどうか、という点にある。できうるなら一過性のものではなく、細くても長く続いてほしいものである。

しかしそれにはまず、日本の読者に受け入れられる中国SFを紹介すべきなのかもしれない。だがそうなると、中国らしさというものが薄れた作品になる傾向が予測され、それはそれで複雑な心境である。イデオロギー臭が強い作品も、また中国作品の魅力だと思っただけだ。

80年代以降に誕生した作家たちの作品は、もっと自由闊達でのびのびとしているものが多い。彼ら若い作品の紹介から始めるというのも、一つの手段かもしれない。そう考えると、今回の潮流で紹介された作品は少し前の世代によるものばかりであった。

今後の課題として、考えるべき部分であろう。

3 中国での日本SF紹介

世界的SF大会の影響を受けたのは、日本だけではない。中国でもまた海外SFを翻訳、紹介するきっかけとなった。

とはいえ、中国では元々欧米SFの翻訳出版はかなり盛んであり、成都大会でも多くの海外ゲストに熱い声援が飛んでいたのも事実である。

そんな中で大きく進展したと言えるのは、日本SFの扱いだろう。それまでの日本SFは小松左京氏、星新一氏を中心とした世代が紹介され、それらが典型的な日本SFであると理解されていたようである。つまり最近のSFは中国ではほとんど紹介されてこなかったのである。

ただし、それにはいくつかの事情が絡んで

おり、中でも著作権問題が大きな要因を占めていたと思われる。実際に、作者の知らないうちに翻訳出版されていたということは数多くあり、それが原因で日本側でも中国での出版状況を把握できていなかったのである。

科幻世界雑誌社は、そういった事態を憂慮して、国際的な立場を確立するためにも、正式な著作権を取得、契約したいと積極的に日本の出版社にアプローチし、きちんと手続きを踏んでいる。こういった出版社が今後、増えていくことを切に望む次第である。

さて、その出版社が発行しているのが、中国最大の SF 雑誌『科幻世界』である。2007 年 11 月号は成都大会と世界大会の特集号である。



分量としては圧倒的に成都大会のものが多く、世界大会の記事はほんの少しである。(上右図の左半分足らずの囲み記事参照) また成都大会の記事においても、日本人ゲストについての記載はなく、すべて欧米作家たちに言及しているのも、中国における日本 SF の位置を表して興味深い。

しかし、『科幻世界 译文』（海外翻訳専門 SF 雑誌）になると、状況は少し異なる。2007 年 10 月号と 11 月号では成都大会での欧米作家についての記事しかないが、続く 12 月号では「我眼中的日本作家」という一頁のコラムが発表されている。



これは日本語のできる編集部員が、成都大会で出会った日本人作家たちの思い出を語っているもので、好意に満ちた文章となっている。実際にこの文章がきっかけで、中国の SF ファンから問い合わせがあり、日本人作家にファンレターのメールが届いたりもしている。こういった草の根的な活動が、日中交流のきっかけになるならば、こんなに嬉しいことはない。

その後、科幻世界雑誌社から、日本の出版社と正式に契約を交わしたのでまずは特集号を組む、という連絡があった。

それが『科幻世界 译文』の 2008 年 5 月号である。



これは一冊まるごと日本 SF を特集しており、なおかつ現在人気のある作家や作品を翻訳掲載しているという点で、画期的である。

掲載されたのは小川一水氏、小林泰三氏、藤崎慎吾氏、石黒達昌氏、梶尾真治氏、飛浩隆氏らの作品で、そのほかに人物篇として小泉八雲氏、山田風太郎氏、菊地秀行氏、田中芳樹氏、水野良氏、京極夏彦氏らが紹介されている。さらに、星敬氏による「早川書房を中心とした日本 SF 発展史」の書き下ろしが

翻訳されている。中国人の目から見た、日本のライトノベル紹介もあり、豊富な内容である。⁽²⁰⁾

この特集は中国人読者にも好評だったとかで、新しく日本SF翻訳小説シリーズの刊行も予定されている。これは長編を中心に、一冊ずつの本を複数巻発行するものらしく、既に契約も終了し、翻訳作業に入っているとのこと。これが無事に刊行されれば、新しい日本SFを系統立てて中国に紹介することができ、日中SF相互理解の更なる発展に貢献することになるであろう。

4 中国におけるSF国際交流

日中SF間の交流はさておき、中国では日本のみならず様々な国のSFと交流、会議などを行っている。目立った活動を行っているのは、中国では唯一のSFに関する大学院を有する北京師範大学、呉岩副教授を中心としたグループである。

呉岩氏のホームページでは、大学院での授業内容や課題、学生による論文が掲載されており、現在進行形での中国SF理論・批評分野の状況を見てとることが出来る。

また、ホームページによると海外からSF関係者を招いて会議を開催したり、台湾に赴いてSF会議に参加したり、出版社を訪問したりと、活発な様子が伝わってきており、今後の氏と弟子たちの活躍に期待したい。

さらに未定ではあるが、ここ数年のうちに、香港を舞台にした国際的SF会議を開催すべく準備中との情報もある。日本からの参加も既に打診されているのだが、それまでに日本側でも、何とかもう少し中国SFを紹介できればと内心焦るばかりである。

[注]

- (1) 拉拉などが代表的な、FTとSFの狭間をいく作家である。またFTやホラーもSFのよ

うな歴史はないが、新しい分野として人気が出ている。『盗墓』(トレジャー・ハンター)シリーズなどはインターネット小説で人気が出たものだが、今やベストセラーになっている。

- (2) 正式には、第六十五回世界SF大会・第四十六回日本SF大会。2007年8月30日から9月3日まで、横浜にて開催。
- (3) 正式には、2007年中国(成都)国際科幻・奇幻大会。2007年8月24日から27日まで、成都にて開催。
- (4) 1963年3月5日に成立。SF作家のみならず評論家や編集、漫画家なども参加。FTジャンルの参加も認められるようになった。現在会員数は約200名。
- (5) 古くからの中国SF翻訳家、かつ中国SFウォッチャー(自称)。同人誌や商業誌などで中国SFを翻訳、紹介しつづけており、中国SF界においても有名。
- (6) 秦莉、姚海軍(以上、科幻世界雑誌社編集)、呉岩、韓松(以上、SF作家)の四名である。
- (7) 「中国科幻小说の諸相(1)」(『北星学園大学文学部北星論集第45巻第2号』/2008年3月)
- (8) 『小松左京マガジン 第29巻』(榊角川春樹事務所・発売元/榊イオ・発行/2008年1月発行)
- (9) 1965年生。新華社で記者として働く傍ら、SF作品を発表。中国では専業作家は少なく、ほとんどが兼業作家である。なお理系出身のSF作家が大半である中国において、韓松氏は珍しい文系出身作家である。
- (10) 1962年生。北京師範大学副教授。専門の教育管理學と同時に、中国唯一のSF教育大学院課程を担当する。SF作家、評論家。
- (11) 『小松左京マガジン 第30巻』(榊角川春樹事務所・発売元/榊イオ・発行/2008年4月発行)
- (12) 『中国SF資料』や東欧SF関係同人誌『イースカーチェリ』など。
- (13) 近年刊行された『星雲組曲』(張系国/山口守・三木直大/国書刊行会/2007年)は台湾のSF作家。張系国は過去にも『SFマガジン』などで紹介されている。
- (14) 内容は10頁から103頁までにわたる。小説や紹介文など「今」の中国SFを伝える画期的な特集といえよう。
- (15) 長編SF『紅色海洋』の一篇で、舞台は横浜。主人公は日本人科学者と生み出された水棲人である。しかし日本人といいながら、中国人

の子孫という記述があったり、社会構造がどう見ても中国であったり、と、日中の混同が見られる。或いは意図的なものかもしれないが。

- (16) 加代子という女性キャラクター。中国人登場人物たちの中に日本人が現れるというのも、日本人読者には親近感を与えたのではないだろうか。
- (17) 新進気鋭の中国文学研究者。当代文学の研究、翻訳を中心に行っているが、近年は劉慈欣評など中国 SF 研究の担い手として活躍している。
- (18) 1943 年生。『科幻世界』創刊に携わり、中国 SF の発展に寄与した。編集者であり、文筆家でもある。四川省のパンダ保護活動にも力を入れており、四川の大地震における臥竜パンダ保護地区での悲劇と奮闘を、散文として記した。これは個人的なつきあいのある人々に配信された私的な文章であるが、素晴らしい内容であった。
- (19) 『世界の SF がやって来た!! ニッポンコン・ファイル 2007』(小松左京監修・日本 SF 作家クラブ編/株式会社 角川春樹事務所/2008 年 8 月発行)
- (20) ライトノベルは中国では「軽小説」と呼ばれる。中国自体で独自のものが発行されているかどうかは確認できていないが、日本のものが大量に小説、漫画、アニメ、ゲームとして入ってきているのは間違いない。

紹介されているのは小野不由美、賀東招二、支倉凍砂、谷川流、乙一、奈須木野子、時雨沢恵一である。面白いのは日本の「萌え」が中国でも「萌」という言葉で輸入され、市民権を得ていることであろう。

[Abstract]

Aspects of Chinese Science Fiction (2):
The Influence of Two International SF Conventions

Noriko YAMAMOTO

This paper reports on recent Chinese Science Fiction. In 2007, two international SF conventions were held in Asia. In Japan and China, people began to have interest in the other country, so they began to introduce their SF novels and situations. In Japan, Chinese SF is not generally known because Japanese SF fans tend to keep Chinese society ideology at a distance. But Chinese literature is bound up with ideology, a fact that accounts for this situation. In China, Japanese SF is popular, but they know mostly older works not present ones. However, from 2007 to now, these conditions have changed. People have begun to follow up new information and actively make cultural exchanges. This paper describes the order of events and describes what happened.